

類似の感情を脱神話化する

ベルクソン『物質と記憶』における一般観念論

原健一(北海道大学博士後期課程)

目の前に、赤いボールが三つあるとする。三つのボールは、いずれもが同じように赤くて、丸い。のみならず、同じような重さ・質感をしている。そして、これら三つのボールについて「これらは同じボールである」と言うことができる。しかし、これらのボールは、数的には別々のものである。それにもかかわらず、これらのボールが「同じボール」であると言えるのはなぜか。その理由は、それらすべてが共有している同一の性質（赤い、丸いなど）があるからである。ここで赤いか丸いと言われているものを「一般観念」と呼ぼう。つまり、一般観念とは、複数の個物によって共有されることで、それらの質的な共通性の根拠となるような観念のことである。本稿の扱う問題とは、このような意味での一般観念を私たちはどのようにして獲得するのかという問題である。

実際そこには多くの謎がある。おそらく乳幼児は赤の一般観念をもたないように思われる。要素的な経験を積み重ね学習していくことによって、どこかのタイミングで、赤の一般観念は獲得されるのであろう。しかし、こうした類の何らかのプロセスを経て一般観念が獲得されるとして、それは具体的にはどのようなプロセスなのか。本稿ではまず、この問いに対する二つの解答——概念論 (conceptualisme) と唯名論 (nominalisme) ——を見ていくことにしたい。『物質と記憶』校訂版に付された註によると、前者はロックの考えであり、後者はホップズ、バークリー、ヒューム、スチュワート・ミル、そしてテーヌの考えに相当する。また、筆者が見るに、前者はトロープから成る類似性グループによって一般観念を説明し、後者は個物から成る類似性グループによってそれを説明する。すなわち、ここでベルクソンが扱っている「概念論」と「唯名論」とは、前者が（現代的な普遍論争の用語でいうところの）「類似性唯名論」、後者が「トロープ唯名論」に近い立場である。

ベルクソンも『物質と記憶』第三章で一般観念の獲得プロセスをめぐるこの問題に取り組んでいる。そこで彼は、概念論と唯名論の議論には、ある種の「循環」があると指摘し、そして、概念論と唯名論が見逃してしまっているある非概念的な認識様態、具体的には「特徴的な性質あるいは類似にかんする錯雑とした感情 *le sentiment confu de qualité marquante ou de ressemblance*」（以下「類似の感情」と略記）という認識様態があることを示した。ベルクソンによれば、この類似の感情を導入することによって、概念論・唯名論の循環を回避できる。では、概念論と唯名論の循環とはどのような循環なのか、そしてベルクソンは類似の感情を導入することによっていかにして一般観念の問題に応答しようとしたのか。これらのことを解明することが本稿の主たる目的となる。

ところで、上記のような議論の進め方はベルクソンに特有のものと思えることができる。つまり、既存の諸理論の説明項の貧弱さを指摘し、新たな説明項を導入することによって、哲学的問題を解決・解消してしまうという戦略である。実際、ベルクソンがここで行なっていることは、概念論と唯名論がある種の概念主義に拘泥してしまっていることを指摘し、身体のもつ習慣的な記憶力の領域を「類似の感情」という名のもと概念論と唯名論の説明の代わりに導入するということであつたと言える。だが、ベルクソンのこのような議論の進め方にはいくつかの問題がある。とりわけ本稿が扱う問題とは、ある種の非概念的認識様態として導入されている類似の感情の存在はいかにして正当化されるのかというものである。確かに、類似の感情なるものを導入すれば、一般観念の問題は解決するかもしれない。この意味で、ベルクソンの理論の方が、概念論・唯名論よりも高い説明力を有すると言える。しかし、この説明力の高さそれ自体は、類似の感情の導入を正当化しないだろう。というのは、まず、ベルクソンは概念論・唯名論よりも豊かな説明項を用いて一般観念の問題に答えている以上、彼の理論の説明力の方が高いのは自明のことである。さらに、理論選択の基準に「単純性」があることが一般に認められる以上、ベルクソンによる類似の感情の導入は、この単純性という点において明らかに他の理論に劣る。要するに、ベルクソンによる類似の感情の導入は、一般観念の問題を解決するためだけに天下り的に導入されているように見えるのであり、彼の説明を正当化するには、類似の感情の導入プロセスを判明にして、この導入それ自体を説得的なものとしなければならない。

以上のことを明らかにすることによって、ベルクソンの身体的な一般観念論の正当性を問うことが本稿の最終的な目的となる。

参考文献

- [1] Armstrong, David. M., (1989) *Universals : An Opinionated Introduction*, Westview Press. (邦訳:秋葉剛史訳(2013年)『現代普遍論争入門』、春秋社)
- [2] 平井靖史他編(2016)『ベルクソン『物質と記憶』を解剖する——現代知覚理論・時間論・心の哲学との接続』、書肆心水
- [3] 石井敏夫(2001)『ベルクソンの記憶力理論——『物質と記憶』における精神と物質の実在証明』、理想社
- [4] 杉山直樹(2006)『聴診する経験論』、創文社
- [5] 鈴木生郎、秋葉剛史、谷川卓、倉田剛(2014)『ワードマップ:現代形而上学——分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社
- [6] Worms, Frédéric (1999) *Introduction à Matière et mémoire*, PUF.